



東京農工大学 大学院農学研究院教授

土屋 俊幸

連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第1回

『忘れられた日本人』

宮本常一著 岩波文庫 1984年(初版は未来社版1960年)

この本は、著名な民俗学者である宮本常一の著作の中でも、おそらく最も人気の高い1冊だと思われる。私は毎年、研究室を卒業・修了する学生たちに本を贈ることにしているのだが、この本は、その贈呈本リストのトップにある。

内容は、宮本が戦前の昭和10年代から戦後の30年代にかけて日本全国を訪ね歩いた聞き取り調査の記録である。明治・大正・昭和を生き抜いてきた古老たちのライフヒストリーを中心に、かつてのふつうの日本人たちの生きざまと当時の日本の風土、日本の社会の有様が、活き活きと描かれている。多くの章では、伝承者自身の語りがそのまま掲載されていて味深い。

多くの人が指摘していることだが、私にとつても、この本の冒頭に出てくる「寄りあい」の記述は衝撃的だった。その村では、大事な案件があると、村中から主だった人々が集まり、結論が出るまで、延々と合意形成のための話し合いを続けるのだという。決して、他の人の意見を否定せず、自由な意見の表明を基本に、行き詰まれば、並行して進めている他の議題に議論を移して冷却期間をおき、最終的に全員が納得するまで議論を続ける。宮本が資料の書き写しをしながらかつき合った会合では、すべての話し合

いが終わるまで、昼夜を継いで3日間に及んだという。事例は西日本で、東日本とは様相を異にするようだが、日本にもこのように豊かな合意形成の仕方があることを、初めてこの本を読んだ大学院生時代の私は全く知らず、村での古くからのしきたりは打破すべきものと決めつけていた。そうした近代化論者の頭でっかちを、この本は思い切りぶん殴り、壊してくれたのだった。

今回、この小文を書くに当たって、何回目かの通読を試みたのだが、また多くの発見があり、この本の奥行きを改めて認識させられた。特に、女性たちが、「世間」を知るために他地域を巡る旅行に出かけることを許容する農村の寛容さ、無益な殺生を戒め、小さな隣人として生き物に慈しみの目を向ける農民の環境倫理、村の発展を願い、無私で村の産業振興に取り組む、無名のリーダー層の真摯さ、そして、各地を放浪する「世間師」たちの、日本人離れた奔放さ。観光レクリエーションや保護地域関連の本では全くないが、日本で物事を考える時、忘れてはならない、日本の社会の何たるかを教えてくれる本だと思う。ぜひ、多くのおみなさんに読んでもらいたい。

(つちや としゆき)



土屋俊幸(つちや としゆき)

1955年、東京都生まれ。ただし、30歳からの17年間は、勤務地の北日本(札幌、盛岡)で、たっぷり自然に触れ楽しんだ。現在は東京農工大学大学院農学研究院教授。専門は一言で言えば林政学。内外のフィールドで、観光レクリエーション、自然資源管理、自然公園などの視点から、農山村の持続可能なあり方について考えている。